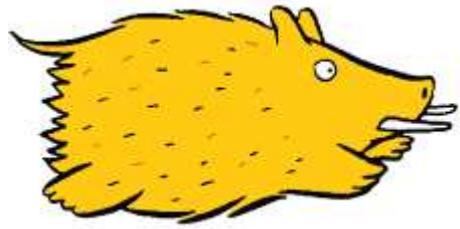




トマンズ隊じゃないから



貝山地下壕編 by うさお



貝山地下壕に行ってきました。ご報告です。

貝山地下壕は横須賀市追浜地区にあります。元々横須賀市は、軍事基地として有名な処で海軍基地や兵器工場、軍需工場、軍病院が数多くあり、大東亜戦争の末期は米軍に対する防空強化のため、1000箇所を超える地下壕が建設されたと言います。

その中でも、追浜周辺には野島公園地下壕、日産工場内の夏島貝塚地下壕、貝山緑地地下壕、浦郷丘陵の地下壕群がマニアに有名です。特に貝山地下壕はマニアが入りやすいらしく、無断入坑している報告が多いです。

さて、東京湾海堡ファンクラブから「貝山地下壕」の見学案内が来ました。おっ、ファンクラブに入っていて良かったなあ。今回はNPO法人「アクションおっぱま」と協同で探訪するとかで、NPO法人から専門家が案内に付いてくれます。

追浜(おっぱま)の歴史遺産

～見学のしおり～



貝山地下壕



NPO法人 アクションおっぱま / おっぱまはっけん倶楽部



～ってやつです)

仕立てたマイクロバスでも用意されているのかと思いきや、神奈川中央バスに乗ってくださって案内だった。

あれっ？

まあ、兎も角、追浜駅からバスで15分ほど海の方に行くと、貝山緑地に到着します。

横須賀市のリサイクルセンター「アィクル」や「エコマルク」と言う工場があります。この工場の裏手が貝山緑地で、その地下に貝山地下壕があります。

パンフレットによると、貝山地下壕を囲むように、北に海軍航空隊本部（現在日産自動車工場）、東に海軍航空隊弊社（予科練）があり、南に海軍航空技術廠がありました。これらを守るために貝山と夏島、浦郷に地下壕が掘られたのでしよう。ロケット特攻機「桜花」やロケットエンジン「秋水」の開発や試験飛行が



桜花

誰が付いてくれるのだろうか。わくわく。

Caccoは「これは地下壕の達人、GURIKO隊長*1」にお声を掛け、是非ともご参加頂かなければと、お誘いメールを打っていました。

追浜駅のコンコースでGURIKO隊長と無事待ち合わせが出来、ファンクラブのメンバーと合流します。初っ端、レストランに連れて行かれ、1000円の食事を取りながら貝山地下壕のパンフレットを渡されます。（表紙がなんだかね



この人が専門家かな？



追浜駅から貝山緑地の方を見えています



ファンクラブのメンバーとお食事、年寄りばっかだ。



行われていた。この開発者達が終戦後、東海道新幹線の車体の設計に携わったことは有名です。

このロケットエンジンの燃料の開発に女性化学者：加藤セチ博士が参画しており、当時の軍事態勢の中では、考えられないような人材登用をしている。よほど優秀な方に違いないと思うが、どのような人となりなのか。

加藤セチ博士：熊本藩の第二代藩主、加藤忠広の末裔に生まれたが、山形の家が没落した。大正期の札幌で女学校の教師をしながら北海道帝国大学に学び（女子学生第1号）農学部を修了した。大正11年、理化学研究所の女性研究者第一号になると吸収スペクトルを化学分析に応用し、「アセチレンの重合」で女性で3番目の理学博士となる。戦中は「航空燃料の改質」、戦後は「抗生物質の開発」などで業績をあげた。



意外と優しい顔立ちの人で、結婚後博士号を授与されている。子供にも恵まれたが、男子は戦死し、女子は嫁して家は途絶えましたが、つまりは主婦の時にロケット燃料を研究していたんですね。

さて、一般公開されている地下道はB地区で、いよいよ

◆ 貝山緑地の地形・地質

貝山緑地は、三浦丘陵（きゅうりょう）といわれる三浦半島を南北に連なる丘陵の北側の一角にあり、一番高いところの標高は41mです。夏島町一帯は平らなため、「丘？」とげげんに思う人が多いかもしれませんが、今から100年余り前は、貝山緑地のある浦郷町五丁目の辺りは海に突き出た半島状の丘陵で、夏島町の大部分は干潟や海でした。夏島貝塚の辺りはその頃、半島の先端約500mの沖合に浮かぶ島でした。1920年頃から貝山緑地北方の海域が徐々に埋め立てられ現在の夏島町の大半を占める広大な埋立地が出現しました。したがって、貝山緑地や夏島、野島などの小高い地形は、埋立地に囲まれています。丘陵といわれる地山（じやま）の地形です。

この地山の表面は、今から約200～170万年前の第四紀更新世の時代に海底に堆積した上総層群（かずさそうぐん）野島層といわれる砂岩や泥岩（でいがん）からなっています。上総層群（かずさそうぐん）と総称して呼ばれる地層はけっこう固くて丈夫なため、ランドマークタワーやベイブリッジなどの大きな建造物の土台になっています。「けっこう固い」というのは、例えば墓石のようにコチコチではなく、爪で引っかけば剥がれるけれど、崖をコンクリートで覆わなくてもすぐには崩れない程度です。野島層は、軽石などの火山の噴出物をサンドイッチ状に挟んでいます。貝化石を多く含んでいることでも知られています。「貝山」という名前もこれに由来していると考えられます。

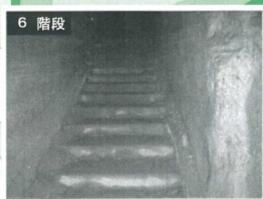
若松 加寿江（関東学院大学工学部 教授）

地下壕に入ってみると（B地区）

◆ 貝山地下壕に入ると（B地区）

貝山地下壕は、A地区、B地区、C地区三つのエリアに分かれ、延長約2,000mに及ぶといわれますが、まだ詳しい調査は行われていません。追浜浄化センター側から入れるB地区は、長い通路を中心に枝分かれし、歩いて回ることができます。中には、便所、炊事場、食糧庫、かまどの跡や食器類も残り生活感があふれる雰囲気があります。
*用途は一部推測です。

- ① 地下壕入口
- ② 木枠のアーチ（倉庫？）
- ③ 水槽？
- ④ カマド跡
- ⑤ 会議室
- ⑥ 頂上への階段



地下壕に入ってみると（B地区）



よ探検です。

専門家の女性の方は大層詳しく事象を説明しておりましたので、この方が若松加寿江先生なののでしょうか？

先達さんが注意点をお話しているのに、参加者の皆さんは自分の装備のことに無我夢中で、ほとんど聞いている人はいませんでした。



ここが入口です。山の麓にあるのですが、参加者がお年寄りばかりなので、「足元にお気をつけください」との注意の最中に、すってんころりんと転ぶお年寄りが続出、ふんと鼻で笑っていたうさおも例に違わずズルリと足を滑らせた。入る前に怪我してなるものぞと、誰にも見られなかったかと辺りを見渡した。



この後姿はGURIKO隊長だが、はっ、早い、私たちを置き去りにして、もう地下壕に突入している。探検にはこの早さが必要なんだな。



中から外見ると、こんな感じ。結構趣があってよろしいなあなって思っていると、先達さんから「一人で逸れないようにして下さいよ」と声が掛かる。こんな処に一人は怖いじゃないか。



落盤などしないように、構造を考えてか綺麗なアーチ状にトンネルが掘られている。

このドラム缶は戦時中のものか？
このおじさんはやけに熱心でしたね。

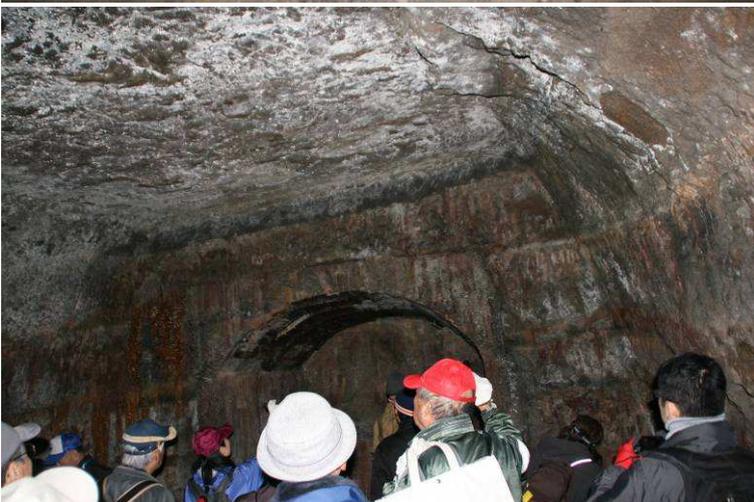


外に繋がる階段があり50段あると聞いた覚えがあるが間違いだろうか？
単独で入って、人目がなければ上の出口まで昇っていけるのになあ。

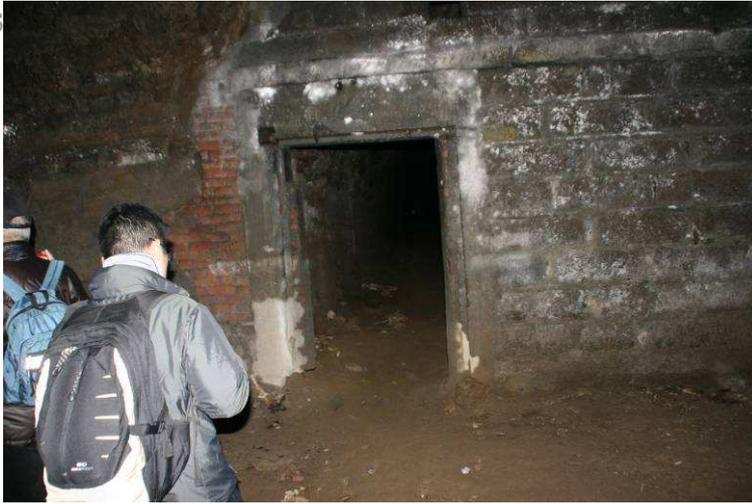


内部は多少湿っているが、他の洞窟と違って以外に乾燥している。やはり、小山の中に掘っているので地下水位が低いのでしょうか。染み出ししている水は水脈からのものかもしれません。

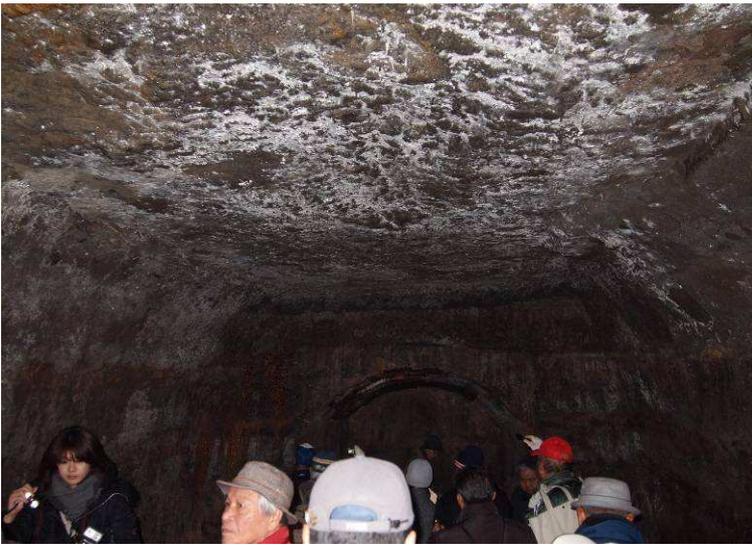
遺物として、煉瓦や碇子が散乱しています。この人は何か蘊蓄を言いたいんだろうなあ。



何かの部屋のようなところに来ました。周囲の壁は猿島の時のように、土丹層を手鑿で掘られています。支保工も無く力学的によく考えられているようです。そうでなければ今頃崩壊していますよね。



また新たな部屋が出現しました。今度は、隔壁が煉瓦積みと石積みです。赤い煉瓦が郷愁をそそります。

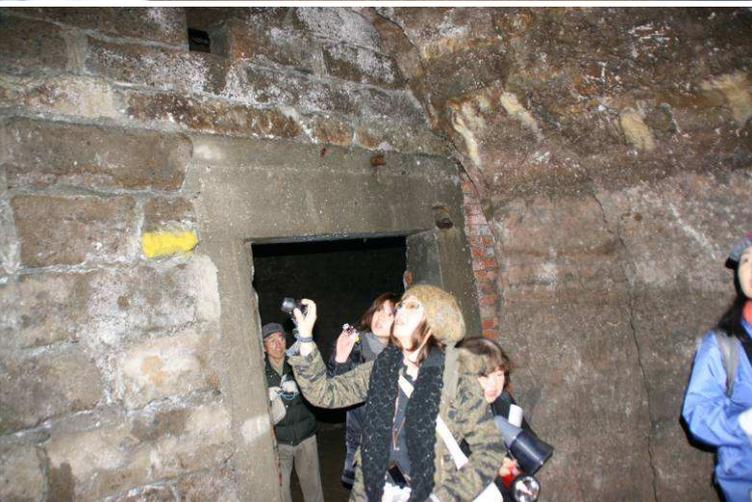


中に入ってみると比較的大きな部屋で、参謀本部の会議室と言う趣です。天井の白いものは、コンクリートの析出物（エフロレッセンス）です。一番左端にGURIKO隊長がいます。



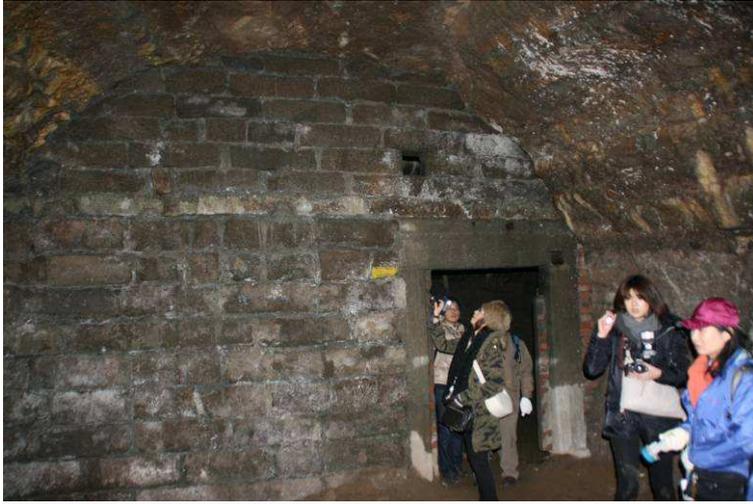
こんな遺物が残っています。食器や何かの入れ物、壺です。毒ガス等が詰められていたようには見えません。そうなら、このメンバー全員アウトですがね。

微妙ですが、壁の上の方に地層が見えますよね。三浦層群の堆積岩であると思われます。なら、地震時には崩壊しやすいなあ。



現地を探索するCacco隊員とGURIKO隊長。二人の間に挟まって地下壕の専門家の先生がメガホンを持っていらっしゃいます。

先生、小さいなあ。
二人が大きすぎるのか。



見上げるCacco隊員、もう次の獲物を探しているGURIKO隊長。

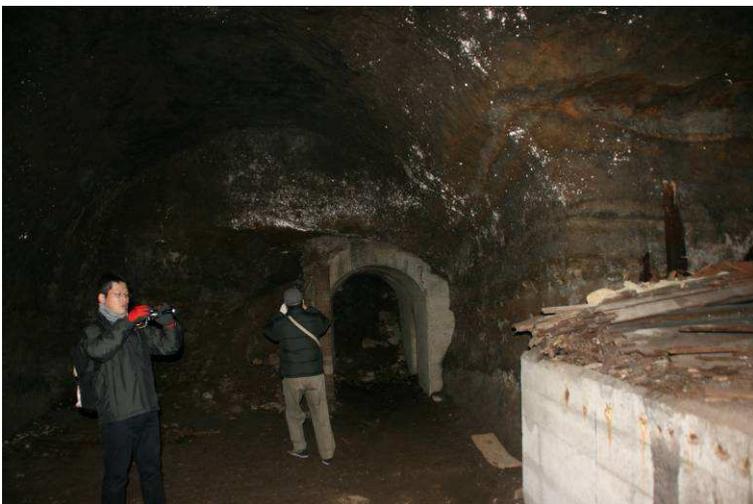
ここの框はコンクリートで仕上げている。この時はまだ1月末だが、夏は室温は如何なのだろう。

洞窟内は夏冬関係なく、16℃と言われているがそれならば意外と快適かも。



探検ツアーの中で一番若いGURIKO隊長に「お姉さん、見てきて！」の声が掛かり、一段高い処に昇らされて、向こう側の溝の中を覗いて見ると朽ち果てた自動車があったそうです。隊長が壕の上に昇ると一斉にシャッターが鳴り響きます。あれれ…怖い所は人身御供を供えて写真を撮るのか。ともあれ隊長の「ありました！」の声に一同ほっとしていました。

(見てもいないのに何で…?)



隊長が撮った自動車

コンクリートで出来た構築物も中にちらほら見えます。



おお何だろう、洗い場かな？排水は如何するのか。田谷の洞窟では地下道の下に更に地下水脈が現れていて、濤濤と流れていましたが…。



部屋の銘版があったと思しき彫り込んだ跡。「司令部」とか・・・。「予科練」とか・・・。



外に通じている洞窟は、何故か生活ゴミで一杯です。安全のために外からの進入を遮るには、堆積物で阻止しなくてはと言う理論になるのかもしれないが、幾ばくかのエゴも感じるね。



おお、お待ち兼の炊事場跡だ。比較的ちゃんとした料理が出来そう。右手の壁に煙突の穴があり、煙突は山腹に通じていると言う話した。



今度こそ正体の判らないものが多く捨ててあった。ロケット用の液体燃料は人体にとって毒性があったそうなので注意が必要だ。



わあい、ようやくお外に出れたぞ。中は広々としていたので圧迫感は無かったが、やはり暗いのは疲れるね。予科練の石碑のある貝山緑地の地下を巡っていたことになります。



一息ついたところで、東京湾第三海堡の海から引き揚げた施設を見ることになりました。

海堡は大正12年に関東大震災によって崩壊し、海中に没しました。しかし、これが暗礁となって海難事故が多発するようになり、第三海堡を引き揚げて航行に十分な海底を確保する工事が始まりました。

探照灯庫、砲台砲側庫、観測所の三つの構造物が、夏島都市緑地内に保存されています。



探照灯

この三つの構造物を海中から壊さずに取り出すのは至難の業とされます。良くここまで原形を保ちながら引き揚げられたものです。

先生が講義されている処を、またGURIKO隊長とCacco隊員が挟むようにして聞いています。先生がまた小さく見えちゃうじゃないか。

隊長の手にあるのはボイスレコーダー、色々な武器をお持ちです。



鉄筋コンクリートでした

こうしてみると遺構も地中海風で趣があります。土木の構造の先生夫婦でしょうか、二人して鉄筋径やピッチを

コンベックスで当たっていました。こっそり耳を敬てていると250mmピッチで鉄筋が入っているようでした。

※1:GURIKO隊長:数々の戦争遺跡を踏破している遺構探検家。隊長は最近のデジカメなどは記録を残す媒体として邪道だと言う意見を持たれており、フィルム・カメラが使われている。しかし、昨今の傾向でカメラメーカー、フィルムラボがデジカメ対応に移行し始めており、銀塩カメラのフィルムを入手するのが困難になってきている。隊長も私財を投げうって探検されているが、この後も銀塩写真家として行動できるのか。



うさおっ、ちいせえ！影が薄い！